

時代の影響を取り入れてポライトネスの変容をとらえる言語行動理論構築の試み

著者	太田 一郎
別言語のタイトル	Constructing a revised politeness theory with consideration for the effect of social change
URL	http://hdl.handle.net/10232/14760

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：17701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21652039

研究課題名（和文）：時代の影響を取り入れてポライトネスの変容をとらえる言語行動理論構築の試み

研究課題名（英文）：Constructing a revised politeness theory with consideration for the effect of social change

研究代表者：太田 一郎 (OTA ICHIRO)
鹿兒島大学・法文学部・教授

研究者番号：60203783

研究成果の概要（和文）：

インターネット上の匿名掲示板における書き込みの分析を行い、人間の普遍的行動理論であるポライトネス理論に「社会の変化」の影響を勘案できる「通時的」視点を加えた理論の構築を試みた。10年間継続している掲示板を選び、各書き込みを、行為機能、話題効果、書き込み姿勢、談話展開の4つのレベルで分類するという質的分析とそれぞれのレベルでどのような談話上の特徴が見られるかを探る量的分析を行った。結果からは社会の動きと談話特徴の関連が推測されたため、時代の影響を反映できる理論化を提案した。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to contrive a revised version of Brown and Levinson's politeness theory by introducing a diachronic perspective. 8908 posts from 2000 - 2009 on anonymous bulletin board '2 chan-neru (Channel 2)' were analysed qualitatively and quantitatively. The results indicated that some changes happened in 'the order of discourse' when we saw quantitative differences in discourse function of posts. Then a possibility of suggesting a revised version of Politeness Theory was suggested.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	0	700,000
2010年度	1,200,000	0	1,200,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	2,800,000	270,000	3,070,000

研究分野：【社会言語学】

科研費の分科・細目：【言語学・社会言語学】

キーワード：【言語行動, ポライトネス, インターネット, 掲示板,】

1. 研究開始当初の背景

Brown & Levinson (以下B&L)のポライトネス理論は1978年の初出から30年たったが、その間、単に言語現象を説明する理論というだけ

でなく、人間の社会行動全般にわたる説明力を持つ重要な理論として受け入れられてきた。ただし、B&L(1987)の理論にはいくつかの問題が指摘されており、現在普遍理論の構築に向けての研究(宇佐美2002など・)が行われるなど、新たな発展の段階を迎えている。たとえば宇佐美のディスコース・ポライトネス理論は、ポライトネス言語行動のダイナミクスを談話レベルで総体的にとらえ、「社会的相互作用としての対人コミュニケーション」の普遍理論を構築する方向へと進展している(宇佐美2008)。

一方社会の状況に目を向けると、日本は80年代以降、「バブル」と「失われた10年」を経て、社会は未曾有の激変を経験した。70年代から徐々に進行していたポストモダンの時代の中で、80年代に入って国家、社会、宗教などが与える「大きな物語」が消失して地域の共同体は解体し、人々は個人的な関心や興味で結びつく個別の「島宇宙」に住むようになった(東2001, 大塚 1989)。とくにその背後には、インターネットや携帯電話などの通信メディアの爆発的な普及に代表されるメディア環境の急速な変容がある。このような社会の現状を考えると、対人コミュニケーションの普遍理論としてのポライトネスは、時代の変化とそれに伴うコミュニケーション行動の変容に対してどのような有効な説明を与えることができるのかという疑問がわく。ポライトネス理論が普遍的人間行動の理論を志向するのであれば、その中に社会の変化に伴う対人コミュニケーションの変容を取り込み、総合的な説明が可能でなければならない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、80年代以降急速に変容した日本社会のコミュニケーション行動の変化を事例として、人間の普遍的行動理論として注目を集めてきたポライトネス理論に「社会の変化」の影響を取り入れた新しい研究法を開発し、「通時的」視点を加えた対人コミュニケーション理論の試案を提示することにある。

「通時的」な研究を行うためには、一定期間にわたり、その内容が比較的均質な言語データにもとづく必要がある。そのため、

- (1) 社会の変化が言語に反映する例として、インターネット上の匿名掲示板（「2ちゃんねる」）をデータとする
- (2) このデータを経年的に分析し、匿名掲示板上で新たな秩序が形成される様子を探り、（談話）ポライトネスという点から考察する

という2点に焦点をあて、調査と分析を行った。結論を先取りして言えば、社会の変化を取り込んだ理論を提示するまでには至らなかったが、データからはその時代の影響があると推測される結果が得られたと思われる。

3. 研究の方法

「2ちゃんねる」は、巨大匿名電子掲示板サイトで、1999年の5月30日に開設された。大きな特徴として上げられるのは「匿名性」である。ハンドルネームなどを用いる「仮名的匿名性」よりもさらに強い「無名的匿名性」をもつ。この「匿名性」はそこで使用される言語に大きな影響を与え、独特の言語的特徴を形成している。

まず、いわゆる敬語がほとんど使用されないという点である。敬語の使用が相手と自分の社会的距離によって規範化されているとすれば、匿名の相手との距離は測りようがない場合には敬語が使用できないというのもひとつの結果と考えることはできる。ただし、日常生活においては見知らぬ相手には敬語を使うのがデフォルトのコミュニケーションスタイルであることを考えれば、「2ちゃんねる」が作り出す世界は特異な言語空間だと言える。実名もしくは個人が特定可能なハンドルネームを使用した記名的匿名性によるコミュニケーションでは、ネット上であってもリアルな相互行為と同様の特性があることを考えると、「2ちゃんねる」はむしろリアルな世界とは切り離された空間とみなすこともできる。そしてそこには、リアルな世界とは異なる規範、秩序が形成されていると考えられる。その規範とは、敬語などを使用した「敬体」ではなく、「常体」的スタイルをデフォルトとするというものである。本研究では個々の書き込みがどのようなスタイルかについては調

べていない（今後は調査する予定でいる）が、書き込みをざっと眺めるだけでもこれは確認できるので、デフォルトのスタイルであることには間違いなからう。

日本語の場合、敬語の使用／不使用がポライトネスの判定の重要な要因のひとつになる。しかしながら、敬語が使用されない世界でのポライトネスはどのようにして維持されているのだろうか。この点を確認するために、本研究では、使用される形式そのものではなく、以下の4つの点から各書き込みを分類、整理し、談話のポライトネスがいかにより構成されるかを探ることを試みた。

【行為機能】各書き込みの談話内のはたらき

【話題効果】談話の流れ与える効果を

【書き込み姿勢】書き込みの意図（推測）

【談話展開】談話の流れの展開

データは談話ポライトネスの経年的変化を見るために、1999年の2ちゃんねる開設時期から継続している「板（いた）」を選んだ。選ばれたのは「ラノベ（ライトノベルズ）板」中の「時雨沢恵一総合スレ」である。このスレッドは、2000年7月23日に始まり現在も継続しているものである。このスレッドの2000年～2009年までの10年間のレスを対象とし、スレのpart1から順々に10スレごと規則的に抽出した計9個のスレ（part1, 10, 20, 30, 40, 50, 60, 70, 80の9スレ）計8908のレス群を調査対象とした。ひとつのスレはレスが1000に達すると終了して新しいスレへと移るが、中には1000に達することなく「落ちて」しまうものもある。そのようなものが含まれているため、9スレでも9000より少なくなっている。

こうして選んだスレ中の各レス（＝書き込み）に、上述の4つのそれぞれのラベルを付していくことでデータシートを作り、各レスの談話内ではたらき、談話の流れ等について検討した。分類にはMAXQDAを使用した。

4. 研究成果

調査対象のスレは次の期間に書き込みが行われたものである。

データ 1: 2000/7/23 - 2001/8/19
データ 2: 2003/4/8 - 2003/5/28
データ 3: 2004/1/18 - 2004/2/19
データ 4: 2004/12/18 - 2005/2/5
データ 5: 2005/11/22 - 2005/12/17
データ 6: 2006/11/19 - 2007/1/4
データ 7: 2007/10/23 - 2007/11/11
データ 8: 2008/7/18 - 2008/9/6
データ 9: 2009/7/23 - 2009/9/18

Part1 はスレが終了するまでに1年以上かかっているが、それ以降は1～2ヶ月程度で終了している。また、スレの間隔はそれぞれ1年程度あいていることから、ほぼその年のスレの様子が残されていると考えられる。

次に各書き込みに付したラベルである。

【行為機能】

1. アナウンス
2. 情報提供
3. 話題提起
4. 発問・疑問
5. 意見
6. 感想
7. つぶやき
8. 返答
9. 反応
10. 意図不明
11. 加害

【話題効果】

1. 会話
2. 肯定
3. 否定
4. ネタ
5. 煽り
6. 意見
7. 疑問
8. 総括
9. 提供・追加

【書き込み姿勢】

1. 意見卓立的
2. 意見表明的
3. 評価表明的
4. 評価訂正的
5. 教示的
6. 教示要求的
7. 意見要求的
8. 非教示的
9. 総括的
10. 回復的
11. 許可的
12. 攻撃的
13. 破壊的
14. 投擲的
15. 交話的

各書き込みは、それぞれこの3つの層ごとにラベル付けを行った。また、いくつかのレスの展開による談話の進行に関しても以下のラベル付けを行った。

【談話展開】

1. 交話
2. 遊び
3. 疑問
4. 攻撃
5. テンプレート
6. 展開不十分

これらのラベルは、個々の書き込みと当該部分の話題の展開という「質的」な分析である。さらに、データの数量的側面をとらえるため

に、このラベル付けの結果を Part ごとに数え上げて、それぞれの数量を経年的に比較検討した。

(1) 【行為機能】

返答	53.6%
反応	24.0%
つぶやき	7.8%
その他	14.6%

(2) 【話題効果】

会話	51.7%
ネタ	26.5%
否定	7.2%
その他	14.6%

(3) 【書き込み姿勢】

交話的	56.0%
意見表明的	12.4%
意見卓立的	5.5%
投擲的	5.2%
評価表明的	5.0%
その他	15.9%

(4) 【談話展開】

交話	29.1%
遊び	21.0%
疑問	7.2%
攻撃	4.5%
テンプレート	2.4%
展開不十分	35.8%

9つのスレの数量的分析の結果は(1)~(4)のとおり。パーセンテージは各項目の9つのスレにおける平均値を表す。

これらの結果からは、スレッドにおける談話の流れに貢献しようとする書き込み（たとえば【行為機能】の「返答」、「反応」、【書き込み姿勢】の「交話的」、「意見表明的」など）が多くを占めており、これらの行為が「ライトノベルズ板」の「無標状態のポライトネス」（宇佐美 2001）を構成する重要な要素だと考えられる。

これらの項目の割合はもちろんスレッドが立てられた時期ごとに異なりがある。実はその異なりには「2ちゃんねる」における相互行為を統制する「秩序」の形成が生じたの

ではないかと推測される。具体的にその様子を考えてみたい。

「時雨沢恵一スレ」は2000年7月23日に始まったが、最初のスレ（本研究のデータ1）は908個目の最終レスに到達するまでに訳13ヶ月かかっており、2ちゃんねるでも開設当初（1999年）は書き込みは比較的時間をかけて行われていたことが伺える。一方約2年半後のデータ2は、2003年4月8日開始で2003年5月28日終了とわずか50日の間でひとつのスレッドが消費されている。このデータ2の時期は、2ちゃんねるが知名度を上げ、さまざまな人々が書き込みや閲覧を行うようになった時期と重なる。（ソースを確認できなかったが、携帯電話からの2ちゃんねるの利用が可能になったのが2003年からだという。）つまり、利用者の増加がスレッド消費の速度を上げたひとつの原因であると言える。

次に、書き込みの内容を見てみたい。データ1と2で【書き込み姿勢】の項目の割合が大きく違う点を上表に示す。この結果からわかるのは、

- ・ 2000年には意見を表明するという形での書き込みが多かったが、2003年にはその割合が大きく減る
- ・ 「攻撃的」と分類できる書き込みは、2000年には1.56%、9つのスレの平均でも2.8%に過ぎないが、2003年だけは10%以上と他とくらべて突出している

ということである。

書き込み姿勢/年	データ1 2000	データ2 2003	データ3 2004
意見表明的 (全体平均) 12.4%	20.89%	3.85%	13.95%
攻撃的 (全体平均) 2.8%	1.56%	10.22%	3.77%

2003年の「攻撃的」の突出は、この時期の2ちゃんねるが「荒れて」いたことの現れととらえることができるのではないかと考えたい。

2ちゃんねるは当初は比較的ネット上の情報リテラシーやコミュニケーション作法に慣れた人々に利用されていたが、そうではないいわゆる「一般人」の参入により、ヘビーユーザー間では暗黙の了解的事項であった常体の使用などの言語形式面を含む相互行為の規範が、ある意味都合良く利用されて規範を逸脱する行為が多数生じ、場を荒らす原因となったのではないかと推測される。

(データ2の期間は、のちに小説化、映画化などにいたる「電車男」の書き込みがなされていた時期とちょうど重なる。) データ2の8ヶ月後の書き込みとなるデータ3では、この両項目は全体の平均とほぼ同じ程度になる。これは、2003年時点では少々混乱気味であったスレッドにおける相互行為の秩序が、参加者たちの一定の理解を得て形成されていったためではないかと考えられる。

2ちゃんねるのスレッドのような無名の匿名性の高い特殊な言語空間におけるポライトネスは、リアルな場面での相互行為とは異なる部分もあるかもしれない。しかしながら、ある一定の目的(この場合はテーマにかなった談話の進行)に向かって談話が進められるかぎり、たとえ敬体が使用されないなどの特徴があるにしても、相互行為は参加者たち間で共有されている(と信じられる)規範に基づいているはずである。その意味では、それぞれ一回の言語行為により生じるFTAの機会とその重みの計算式も、基本的にはB&Lが提案したものを仮定することができるだろうと思われる。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

ただし、この計算式は今回のデータのような経年性が考慮に入られていない。そこで本研究は次のような経年性を含む計算式を提案する。

$$W_x = T_i(D(S, H) + P(H, S)) + R_x$$

T_i は、 i というある時機における「時代の影響 T 」を意味する。匿名掲示板では D と P は「ゼロ」もしくは「固定 (= 可変性なし)」と見積もられる。社会的、文化的要因としては R が設定されてはいるが、 x という行為の負荷度はいつの時代も一定ではなく、何らかの時間の影響を示す項を入れたほうがより精密な計算が可能となると思われる。この T については今後さらに考察を深めねばならないが、刻々と変化する現代社会の状況に応じて談話の秩序も変化し、その変化に対応する(時代の影響を取り入れる)必要があることは疑いない。ここまでの研究期間内に本研究がたどり着いた結論である。

5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田一郎 (OTA ICHIRO)
鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号：60203783

(2) 研究協力者

宮崎陽悠 (MIYAZAKI HARUHISA)
独立行政法人国立病院機構 鹿児島医療センター